給水塔保存運動から27年―市民の力で公的資料館（北九州市平和のまちミュージアム）を実現

大石　正信（元北九州市職員労働組合書記・現北九州市議会議員）

はじめに

2022年､4月19日「北九州市平和のまちミュージアム」が開館しました。1995年戦後50年の旧陸軍小倉造兵廠保存の運動から27年間の市民の粘り強い運動で、自治体直営の公的資料館を実現させたのは全国で初めてのことです。これまで、平和資料館をつくる運動に係わってこられた先輩たちの多くの方が亡くなられましたが、その方々に対して喜びの報告ができます。この平和のまちミュージアムの特徴は、①長崎に投下された原子爆弾の第一の目標が小倉であったこと②米国立公文書館の資料をもとに、原爆投下の経緯、小倉陸軍造兵廠の航空写真など貴重な展示をさせたこと③侵略戦争の拠点であった小倉陸軍造兵廠の存在を明らかにさせたことです。平和資料館をつくる会の小野逸郎事務局長をはじめ平和団体･新婦人･共産党市議団・同門司小倉地区委員会・全国や県内でご支援をいただいた方々に心より感謝致します。

1　1993年小倉の町に関心を持ち調査活動

私は、1993年35歳で、北九州市職労に就職しました。市職労の自治研活動を通じて、自分の住んでいる町である小倉の歴史に強い関心を持つようになりました。小倉の中心市街地に、TOTOや安川電機など工場群が存在していることが疑問でした。市職労の先輩から、1923年9月1日の関東大震災で、東京の小石川にあった陸軍造兵廠東京工廠が壊滅的打撃を受け、小倉市が1933年に小倉陸軍造兵廠を誘致して建設したことを聞きました。西日本最大の軍事工場では、最大4万人が働いており、女子挺身隊や勤労学徒などが動員され、風船爆弾や軽戦車・小銃・砲弾・毒ガス弾・機関銃などの兵器が中国大陸への侵略戦争の拠点になっていました。そのため､「長崎に投下された原子爆弾投下の第一目標が小倉であったこと」と聞き、大変驚きました。しかし、小倉陸軍造兵廠に関する資料も出版物もなかったので、図書館での調査や造兵廠のOBである大辻清次郎さん（研究所設立時の役員の一人で、当時　志徳団地自治会会長）などから話を聞きました。

重機で穴を空けられた給水塔（95年10月）筆者撮影

井上議長に陳情書を提出する筆者（95年6月20日）

2　小倉陸軍造兵廠の給水塔保存運動

小倉陸軍造兵廠の給水塔は、造兵廠の工場に作業水や上水を紫川から引いた施設でした。1995年4月29日、16団体55人が参加した安保破棄・小倉地区基地調査行動において、見学しました。その給水塔を見学した市民から「戦後50年・給水塔を平和のシンボルとしてぜひ保存してほしい」と要望されました。私は市職労書記在職中に北九州市が9月議会で1225万円の予算で給水塔を解体する計画であることを知り、日本共産党門司小倉地区委員会で平和統一戦線部長として「給水塔を平和のシンボルとして保存」することを日本共産党や関係の会議で確認しました。その後、6月18日、健和会大手町病院の食堂で70人が参加して「給水塔保存推進会」の結成式を行い、私は同推進会議の事務局長になりました。その時、大変驚いたことに、当日のNHKのお昼の全国ニュースのトップニュースで、同推進会の結成式が報道されました。このNHKのテレビを見た全国の造兵廠OBや市民から次々と激励が寄せられました。また、6月20日井上勝二市議会議長に1,173人分の陳情署名を提出するなど連日、新聞やテレビで給水塔保存問題が報道され、北九州市政の中心問題となりました。

3　「平和のための戦争展」で大きな反響が寄せられる

1995年8月4~6日、北九州市の「第1回平和のための戦争展」が市立商工貿易会館で開催されました。戦争遺品や小倉陸軍造兵廠や曽根毒ガス工場跡、風船爆弾などの手作りのパネルを展示しました。また、健和会看護学院では、記録作家の林えいだい氏が「風船爆弾」の記念講演を行いました。造兵廠では「ふ号」作戦として、2,800人の女子挺身隊を昼夜働かせ、和紙とコンニャク糊で1,025球製造し、現在の千葉県一宮市や福島県勿来市から偏西風に乗せてアメリカを攻撃していました。この「平和のための戦争展」を通じて、造兵廠のOBや元学徒動員の方など、興味のある方がたくさん訪れ、戦争体験を聞き、多くの仲間をつくることができるなど給水塔保存を求める運動が大きく盛り上がりました。

4　17日間800人の座り込みの大闘争

1995年9月29日の9月議会で、「給水塔保存」陳情が不採択になり、10月3日、市は、給水塔を解体する工事に着手したため、10月14日、給水塔前で「緊急抗議集会」を開催し80人の市民が集まりました。しかし、市は、給水塔の保存を求める市民集会終了の1時間後に給水塔の本体に約2メートルの穴をあける工事を強行しました。これに怒った市民が14日から座り込みを始めました。給水塔前では、市民に退去命令が出され排除工作が行われる下、市職員・警備員・業者50人と座り込みを行う市民との間で大攻防が展開され、17日間で延べ800名が参加する大闘争になりました。給水塔保存を求める市民の大きな世論の力で、10月25日から市当局と4回の交渉を実施しました。

その結果、10月30日には、「①小倉陸軍造兵廠が存在していた歴史的事実を伝える　②給水塔の一定部分を保存し、大手町のしかるべきところに据える　③その形態等には推進会議代表の意見を十分に反映する」という内容を確認しました。これは末吉元市長の代理である板倉助役（当時）と交渉した結果です。これに同会としても合意し、座り込みを解除しました。この確認に基づき、給水塔解体の条件として、2001年5月に大手町公園の一角に高さ2m・6分の1の給水塔のレプリカを保存させました。また、「歴史的事実を伝える」の確認に基づき、「給水塔保存推進会議」は「平

重機で穴を開けられた市民の座り込み行動95年10月（筆者撮影）

和資料館をつくる運動」に名称と目的を変更して、動き出しました。

5　平和資料館をつくる運動に発展

翌年 1996 年 2 月に「北九州に平和資料館をつくる会」（以下、平和資料館をつくる会）を結成し、小倉北区片野の古賀歯科医院の一室に、市民から寄せられた戦争遺品 4,000 点を展示する民間の「平和資料館準備室」を開館し、平和資料館を市につくらせる運動を展開しました。

一方、北九州市は、2004 年 8 月埋蔵文化センターに「戦時資料展示コーナー」を設置しました。しかし、平和資料館をつくる会は、展示内容も極めて不十分であり、公的な平和資料館がどうしても必要であるとの認識に達しました。

2000 年 8 月の「戦争展」では、小倉南区にある曽根毒ガス工場跡を 50 人で見学会を開催しました。この毒ガス工場は、1937 年に開設された、正式名称を「東京陸軍第 2 陸軍造兵廠曽根製造所」といいます。「平和のための戦争展」では調査のため小倉南区吉田地域の住民から聞き取り調査を

行いました。旧陸軍は、毒ガス弾 746 万発の内 161 万発を同工場で製造していました。地元では「近所の方が毒ガス工場で働いており、毒ガスが漏れたことが分かるように小鳥を持って仕事をしていた」「戦争が終わると海洋投棄した」などの証言を得ることができました。また、2000 年 8 月には、広島県大久野島に調査に行きました。大久野島から鉄道で毒ガスを運び、小倉南区にある下曽根駅から馬車やトラックで運搬していました。毒ガス工場は、小倉陸軍造兵廠で作製した砲弾に自然流下で毒ガスを充填する化学兵器を製造する秘密工場 (1) でした。その後、毒ガス弾は、小倉の城野補給処を通じて、中国大陸に送られていました。現在、曽根毒ガス工場跡は、1970 年代からは自衛隊が米軍と海外で戦争するための陸上自衛隊の「都市型戦闘訓練施設」にされていることも判明しています。この歴史的遺産の保存を求める声も出されています。

6　米国立公文書資料館で、原爆投下の経緯明らかに

1998 年 8 月「平和のための戦争展」では、山口県周南市の徳山工業高等専門学校の工藤洋三教授を招き「原爆投下の経緯」を講演してもらいました。工藤教授は、「原爆投下は、米軍が 1944 年サイパン島・テニアン島・グアム島に基地を建設したことで、B29 による日本本土爆撃が可能になったこと。米国の原爆投下の（マンハッタン）計画は、秘密裏に莫大な予算をかけて、原子爆弾のもたらす人体実験でもあったこと。投下目標は、広島が 1 番、小倉が 2 番目 (2)、長崎が 3 番目であり、上空 600 メートルで爆発すると直径 4.8㎞の円内はすべてを破壊するため、168,000 人の都市である小倉市を想定したこと。小倉は工業都市で破壊予想の市街地であり原爆投下の条件を満たしていたこと。米国作戦命令書には『造兵廠を含む小倉市街地』とされていること。投下目標は、造兵廠ではなく造兵廠を含む小倉市街地であること。長崎に投下目標が変更されたのは小倉の『天気が曇っていたため』が通説とされていたことは正確ではないこと。

9 日の小倉上空を飛来したボックスカー号の機長は、10 時 44 分『濃い靄と煙に覆い隠されていた』と証言しており、前日の八幡大空襲の煙が小倉上空まで舞い上がっていた。作戦命令書の『完全目視下において照準、投下する』を守り、3 回試み

た後、投下を断念し、長崎に目標を変更した」と報告されました。このように、米国立公文書館の資料に基づき、事実を明らかにしたことは貴重な成果でした。

7　北九州市の戦争遺跡の調査・記録

また､毎年の「平和のための戦争展」を通じて、語り部や戦争遺品の展示、講演会を開催。小倉陸軍造兵廠の地下道は、安川電機から JR 西小倉駅まで 1,4 キロに地下道や枝線が掘られており、貴重な戦争遺跡です。「戦争展」の一環としての地下道見学には約 400 人の市民が 3 班に分かれて見学会など戦争遺跡の調査を行い、2006 年に「北九州の戦争遺跡」のガイドブックを発行してきました。

1997 年 7 月､「静岡平和資料館をつくる会」から平和資料館をつくる会の小野逸郎事務局長が「風船爆弾」を譲り受け、私や資料館の事務局メンバーが破れた 10m ある風船爆弾を和紙とコンニャク糊で修復作業を行い、8 月の大手町病院の体育館での「戦争展」で「風船爆弾」を展示しました。その後､「戦争展」で八幡市民会館の前で展示中に強風と雨で、風船爆弾は壊れてしまいました。

2007 年に小倉陸軍造兵廠第一工場の屋上にあった「防空監視哨」を小倉北区大手町グランドに移設しました。また、門司区の水雷特攻基地であった「蕪 (かぶ) 島 (しま)」の調査を行いました。戦時中に爆弾が運動場に投下された小倉北区にある北九州私立三郎丸小学校では、6 年生になれば平和資料館に来館することが決まっていました。6 年生を中心に、自分たちの戦争展も開催しました。私も若松区の北九州市立古前小学校で平和教育を行いました。

8　市に戦争体験を記録させる

1999 年 12 月 5 日には「北九州市の空襲を記録する会」を結成し、1944 年 6 月 16 日の「八幡製鉄所空襲」での製鉄所爆撃の本やビデオを発行しました。松本清張氏の『黒字の絵』で紹介された 1950 年朝鮮戦争の際に、岐阜県の米軍第 24 歩兵連隊から城野分屯地に移送されたアフリカ系の米兵 250 人が、小倉祇園太鼓の音に刺激され、脱走した事件がありました。私はこの城野分屯地に送られてきた米兵第 24 歩兵連隊が駐留していた岐阜県各務原市に調査に行き、市民が戦争体験談を詳しく記録していることに驚きました。私は市議会で、この各務原市の経験をもとに、北九州市でも戦争体験を記録するよう要望し、市政だよりで戦争体験を募集し、本の発行や DVD 映像を市に記録させることができました。その一部が平和のまちミュージアムでも放映されています。

9　市民運動の力で公的資料館を実現

北九州市は平和資料館を建設や小倉陸軍造兵廠の存在も否定的でした。党市議団はくりかえし､「非核平和都市宣言」や平和資料館の実現を市に求めてきました。その結果、2009 年に「非核平和都市宣言」が全会会派一致で議決しました。そして、2016 年 12 月には、前北橋市長がついに世論に押されて「平和資料館建設」を答弁し、やっと北九州市で平和資料館建設が現実のものとなりました。市民による 27 年間の粘り強い運動で、北九州市に公的平和資料館である平和のまちミュージアムを建設させることができました。

平和のまちミュージアムは、市民から寄贈された資料や戦争遺品の展示、小倉陸軍造兵廠、アメリカの国立公文書館の原爆投下の経緯､風船爆弾、戦時下の暮らし、映像体験ができるコーナーを展示しています。

一方、後世に戦争の悲惨さ平和の尊さを伝えるため、平和授業の一環として、同ミュージアムで「語り部」による被爆体験の講演は実現していま

せん。しかし、「戦績・遺跡ツアー」は実現しました。

党市議団は、この中止を問題であるとし、再開を求めています。

10　最後に

私と党市議団は、一貫して北九州市に対して戦争の「加害と被害」の両面を展示すべきだと主張してきましたが、残念ながら現政権への忖度として「加害の責任」はあいまいです。市は私たちの要求を一定受け入れましたが、平和のまちミュージアムを運営委員会方式で市民の意見を反映すべきであることを要望しましたが、市民の代表の参加を認めていません。今後、展示方法の改善も大きな課題です。その限界を克服するため、「平和資料館準備室」を引き継いで、北九州市若松区で「民間の平和資料室・テイコ・ピレイス」（若松区蜑住 245-3TEL090-4514-2365）を開館しています。

2022 年 8 月 27 日開催された「平和のための戦争展」は 27 回目でした。つまり平和資料館をつくる運動と「戦争展」は一体に運動してきた証です。「戦争展」では、平和資料館をつくる会の小野逸郎氏と大石正信と民間の平和資料室を若松で引き継いだ小松芳子さんの 3 人の対談で一区切りをすることができました。今後、平和資料館運動は、自公政権による、台湾有事を口実にした、「敵基地攻撃能力の保有」、軍事費の大増強、9 条改憲など戦争する国づくりをさせないためにも平和資料館の役割は、一層重要になっています。

（おおいし　まさのぶ）

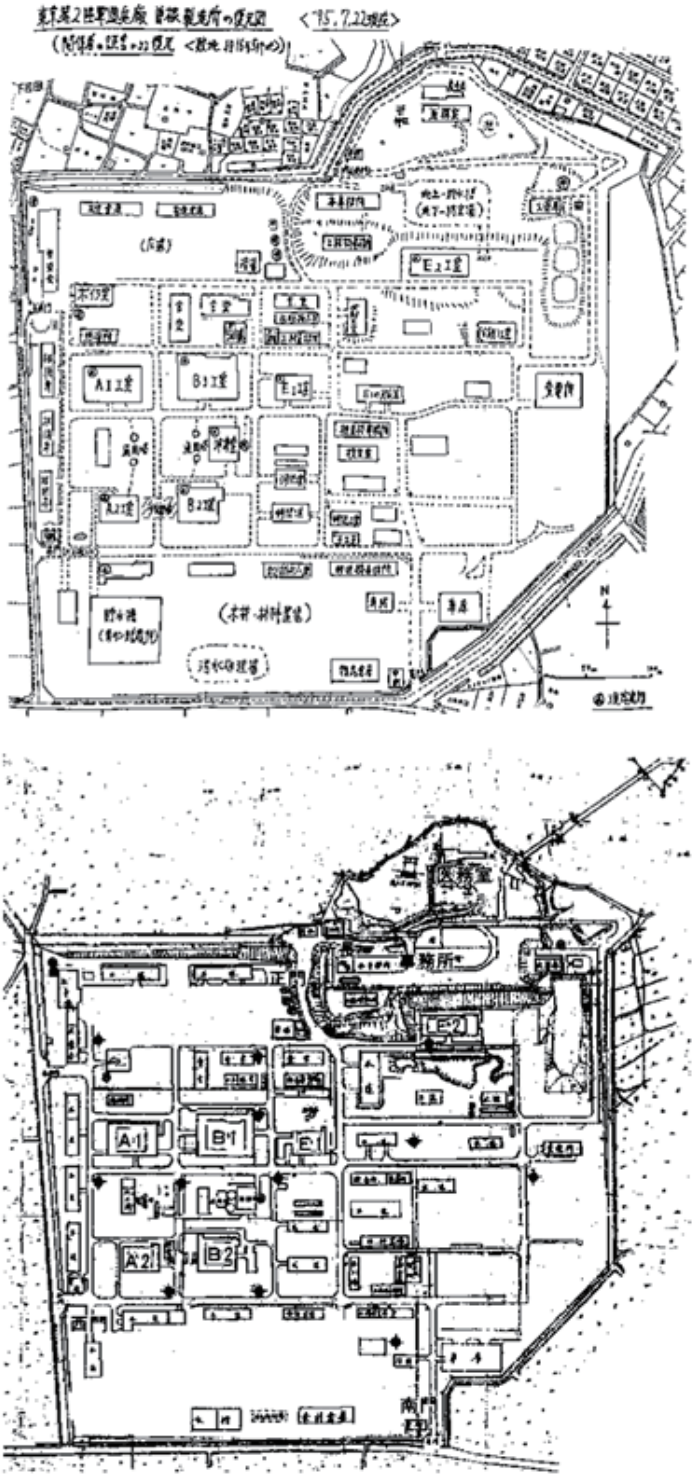
【註】

（1）陸軍毒ガス兵器工場曽根製造所遺跡の現存遺構とその意義―国内最重要級の戦争遺跡：西南学院大学博物館研究紀要　第 12 号 pp.19-65. 2024 年 3 月伊藤　慎二

「各工室における毒ガス兵器製造は、以下のような手順であった。毒ガス弾・毒ガス筒へのガス液填実（充填）方法は、最初にガス液の入った容器「ボンベ」を各工室の２階部分などの高所に設置し、真下に弾丸弾体を置いた。そして、パイプによる自然流開閉機を開いて填実する。その後、弾丸のガス填実口を工具「万力」を使いネジで締めつけるという簡単な方法であった。そのため、工室内には常に毒ガスが充満している状況であったという（工藤 1997：216 頁）。当時実際に作業に携わった岡田清氏も、同様の作業工程を図示している（第 4 図）。戦時中の曽根製造所内部の状況については、工藤瀞也氏 (工藤 1997) ・尾崎祈美子氏 (尾崎 1997) ・岡田清氏（岡田 2001）の著作が詳しい。これらの各著作では、細部に異なる名称もあるが主要な施設名称の一致する曽根製造所施設配置図（第 5 図）が掲載されている。なかでも、工藤瀞也氏の著作『小倉と原爆』は、元工員の証言を基に、主要な各建物の当時の使用状況についてまとめた唯一の文献である。そこで、以下の現存各建物遺構の役割や当時の使用状況に関しては、おもに工藤氏の著作記述を基に「当時の状況」としてまとめた。

（2）1998 年 8 月 9 日 工藤洋三教授の小倉での講演より「第 509 混成軍団の「作戦の要約」では、「小倉は工業中心地での八幡に近く、北九州に位置する人口 168，000 人の都市である。この目標は、大きさが 3 マイル × 2 マイルで、多くの重要な工業目標がある」。ここが、重要な部分で、目標は造兵廠ではなく、小倉陸軍造兵廠を含む小倉市街地でした。原爆を開発したアメリカの科学者は、原爆が地上 600 メートルで爆発すると直径 3 マイル（4.8㎞）の円内をすべて破壊することを想定していました。そのため、爆弾を落とす都市は直径 3 マイル以上が必要であるとしていました。小倉はこの条件を満たしていました。

第５図



曽根製造所施設配置図・出典：ゼンリン社1984年版住宅地図

【参考文献】

工藤瀞也（1997）『小倉と原爆：軍都小倉と毒ガス爆弾・風船爆弾製造の記録』、あらき書店（福岡）

尾崎祈美子（1997）『悪夢の遺産：毒ガス戦の果てに～ヒロシマ・台湾・中国』、学陽書房（東京）

岡田清（2001）『東京第二陸軍造兵廠曽根製造所：その歴史と背景』、旧曽根製造所毒ガス傷害者互助会、私家版（福岡）